

草庵仏教

第191号
(発行日)
2006年5月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mailadress--bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《聞法会ご案内》
○〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
○〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
○真宗共学会――毎月第一と
第三木曜日午後7時より。
*8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

真宗問答(二二二) 第十七願その二

T「これまで阿弥陀様の前身(因位)であります法蔵菩薩が起された四十八願のお話をお聞きしています。先月は第十七願の願名である〈往相廻向の願〉についてお聞きしました。今月は、親鸞聖人が第十七願を
〈また選 択 称 名 の 願 と 名 づ く べ き な り 〉
と仰せられた、そのお心をお聞きしたいと思えます。まず第十七願は
たとい我仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して我が名を称せずは、正覚を取らじ
(わたしは仏になるとき、すべての世界の数限りない仏がたが、みなわたしの名をほめられとなえられないようなら、わたしは決してさとりを開きません)と誓われています。この願には、
(選 択 称 名 (称 名 を 選 択 す る) の 願) といわれなければならぬような思召しがあるということですね。なぜですか」

D「このいわれのもとには、仏説無量寿経に説かれています。経説によりますと、法蔵菩薩は一切衆生を救いたい、浄土に生まれさせたいという広大な願いを起こされ、どうしたらこの願いを実現できるかを永い間ご思索になられました。そして法蔵菩薩は、衆生を平等に浄土に往生せしめる行をさまざまに行の中から選びとられました。それが称名念仏なのです。さまざまに行(涅槃へのおこない)の中から法蔵菩薩が選びとられたのが称名念仏で、それが第十七願に頭れ出されていると、宗祖は領解されたのであります。すなわち第十七願の〈我が名を称せずは正覚を取らじ〉の文言がそれです。このように法蔵菩薩が選出した称名念仏がこの第十七願に頭れ出されているので、第十七願を〈選 択 称 名 の 願 〉とも申されるのであります」

*
T「なぜ法蔵菩薩は称名念仏を選ばれたのでしょうか」
D「これについては、法然聖人が『選 択 集』の中にくわしく述べておられます。それによりますと、称名以外の他の様々の行は行いがたく、称名念仏は行いやす(易)いからです。それで称名念仏は易行と申され、それ以外の行じがたいさまざまに行(諸行)を難行といわれています」
T「具体的にはどんな行を難行といわれるのですか」
D「戒律を守るとか、坐禅をするとか、布施の行とか、父母に孝養(孝行)の行をするとか、仏教の学問を身につけるとか、そういう行を実践していくことは凡夫には大変難しいものです。もしもそういう行をおこなう衆生を救おうという願であれば、そういう難行を行じることのできるすぐれた人は少数であり、できない人は多数です。そうなると一切衆生を救うことはできません。そこで、誰でもがいつでもどこでも為すことのできる行は何かを法蔵菩薩はお考えになりました。そして易行である称名念仏を選び取られたのです。口で阿弥陀仏の名を称えることは誰でもが為すことのできる易しい行だからです。そして他の難行を選び捨てられたのです。こうして法蔵菩薩は称名念仏でもって一切衆生を救おうとされた、その思召しが第十七願に表されていると、宗祖は見られるのであります」

T「なるほど法蔵菩薩はだれでもができる行を選び取られた、それが称名念仏なのですね。今一度確認したいのですが、称名念仏というのは」
D「阿弥陀仏の名である南無阿弥陀仏を口に称えることです」
T「第十七願に阿弥陀仏の前身である法蔵菩薩が〈我が名〉といわれるのは南無阿弥陀仏の名なのですね」
*
D「ええそうです。それと『選 択 集』には、法蔵菩薩が称名念仏を選ばれた理由をもうひとつあげておられます。それは、阿弥陀仏の名いわば仏名には仏の徳がすべてこもっている、だから法蔵菩薩は仏の名(南無阿弥陀仏)を選ばれたのであろう、と法然聖人は仰せられています」
T「なぜですか」
D「たとえていえば、家という名のなかには、棟、梁、椽、柱など家を構成するものがすべて含まれるが、柱や椽などの家の部分の名には家全体をおさめることができない。そのように仏の名(名号)には四智とか三身・光明・利生(利他)などの仏徳がすべてこもっているから、だから法蔵菩薩は仏の名号を選ばれたのだと述べられています」
T「たとえば仏徳の一つである光明という名には仏徳の全体はおさまらないが、仏名には仏徳の全体がおさまっているから、ということですね」
D「そうですね。ここで仏の名に仏の徳の全体がおさまっているという事は、仏徳とは仏のよき働きであり、その全体が仏の名におさまるといえるのですから、仏の名がそのまま仏そのものであるということを表しています。このことを名体不二といっています。名と本体は二つで

はない一つだということですが

T 「通常は名と本体とは別々です。たとえば火という言葉と実際の火とは別です。火という言葉と火そのものが一つなら、火と発音したら火によって唇が焼けますがそうはならないのは火という言葉と火そのものとは別だからですね。ところが仏の名(南無阿弥陀仏の名)と阿弥陀仏そのもの(体)とは一つということですね」

D 「ええ、そうなのです。ナムアミダブツと称えられる南無阿弥陀仏の名はそのままが阿弥陀仏なのであるという、こういういわれです」

*

T 「そこがよくわかりません」

D 「ものごとを表す言葉の中には名と本体が一つであるという、そういう質の言葉があるのでですね。言葉には大きく分けて情報言語とか実用語とか、事柄を他に伝える単なる手段(道具)としての言葉と、一方、直接的表現言語・詩的言語のような、ものそのものが言葉となつて表れた言葉があると言われています。日常使われている言葉のほとんどは情報言語でお互いがやりとりしています。(明日の天気は晴れです)とか(私の趣味はゴルフです)などのような実用語です。ところが哲学者であり真宗人である大峯顕先生がよくいわれるように、すぐれた俳句や詩などの詩的言語のよ

うに、ことがらそのものがそのまま表現される、そういう言葉があるとされます。事実やものとそのままだが、それ自身も直接表現してくるような言葉があり、阿弥陀仏の名はそのような表現言語だといわれています。

南無阿弥陀仏の名は、情報を間接的に他に伝える道具としての言葉ではなくて、阿弥陀仏そのものが直接私たちに自己表現をとって現れる、そういう名であり、人をして目ざめを喚起する表現言語なのです」

T 「難しいですね」

*

D 「言語論はともかくとして、

宗祖は南無阿弥陀仏の名そのものが仏徳の全体、すなわち阿弥陀仏そのものなのだと仰せられているのです」

T 「阿弥陀仏の名を選び、阿弥陀仏の名号でもって衆生を救おうとされる思し召しの中に、阿弥陀仏の名はそのまま仏徳の総て(すなわち仏そのもの)であるという意義があるから、法蔵菩薩は阿弥陀仏の名号を選び取って、これでもって衆生を救おうとされたのです」

D 「ええそうお聞きしています。ですから私たちがナムアミダブツとお念仏を申しますと、そのナムアミダブツは阿弥陀様そのものがわたしにお出ましくくださった姿なのです。妙好人の松並松五郎さんの法歌に
喚びづめ 立ちづめ 招きづめ

弥陀はこがれて あいに来た

そのお姿が 南無阿弥陀

仏

という非常にありがたい歌があります。阿弥陀様が南無阿弥陀仏のみ言葉となつて私に会いに来てくださったっている。この南無阿弥陀仏の名号は、間接的に阿弥陀仏の内容を伝える道具や手段ではなくて、阿弥陀様そのもの、私を撰取したもう阿弥陀仏そのものなのです。(わたしはここにいる、汝を助ける、心配するな)と喚びかけたもうのです」

T 「私たちはお念仏を申しても、阿弥陀様そのものが今ここに私を求めて私にであい、私を撰取してくださるということに気がつかないのです」

D 「ええそうなのです。今まで称えていた念仏が如来様ご自身であつたと気がつかないのです。また、念仏者の木村無相さんは
ひとこえ ひとこえ
如来のおでまし
ひとこえ ひとこえ
浄土真宗

とうたっています。一声のお念仏は、如来様が私におでましくくださるお声である、そのほかに浄土真宗はないとうたわれています。また曾我量深先生のお言葉に
南無阿弥陀仏は生ける言葉の仏身なり

という名句があります。言葉にまでなられた阿弥陀仏が南無阿弥陀仏の名号であるとの思し召

しです。これも尊いお言葉です」

T 「ナムアミダブツという称名念仏の声がそのまま阿弥陀様の自己表現なのです。法蔵菩薩はわたしどもを救うために南無阿弥陀仏の仏名を選ばれ、仏名として私どもにご自身を表して私どもを救おうとされた、そのお心が第十七願に表されているといえるのです」

D 「ええですから、第十七願にはこのように阿弥陀仏の大悲が色濃く表されているので宗祖はこの願を(大悲の願)ともいわれています」

T 「そうしますと選択称名という意味は、法蔵菩薩が易行としての(称名の行)を選びとられたという意味と、仏のお徳の全体である(仏名)を選び取られたという意味があるわけですね」

*

D 「ええそうです」

T 「法蔵菩薩が称名念仏を選び取って、この仏の御名でもって衆生を救おうとされたというお心は第十八願の思し召しだと以前聞いたことがあります。もしそうであるとすると、第十七願のお心と重なると思うのですがこの点はどう受け取ったらいのですか」

D 「第十七願と第十八願は二つ離れたものではなくとも一つのお心です。それを二つに分けて、一つのお心の内容を鮮明にされたのでありましよう」

T 「称名を選択されたことでは

うとそこはどうなるのですか」

D 「称名念仏を選ばれた法蔵菩薩の願心は第十八願であり、その願心によって選ばれた称名念仏は第十七願において顕れたとお聞きしています。称名念仏を往生の行として選びとる側の心は第十八願に、選びとられる側の称名念仏を表されたのが第十七願ということですが」

T 「もう少しやさしくいってくださいます」

D 「つまり、(選ぶ行いや選ぶ心)と(選ばれたもの)とは離すことはできません。これは選ぶ行為だけでなく、多くの行為がそうです。たとえば、つまむという行いとつままれた物とは切り離せません。つままれた物がなければつまむという行為は成立しません。呼びかけるという行為と呼びかけられるものとは離せません。食べることと食べられたものとは離せません。食べられた物がなくして食べない行為は成り立たず、食べないのに食べられた物はありえませんが、そのように選ぶ行い(心)を離れて選ばれたものはないのです。そこで、選ぶ側のお心を第十八願に、選ばれた仏名を第十七願に表されたのではないのでしょうか。その意味で法蔵菩薩が選択された称名念仏が第十七願に顕れ出ているといえるのでありましよう。それで宗祖は
この行は大悲の願より出たり
と仰せられています(了)

歎異抄

後序第十一講

これさらにわたくしのことばにあらざといえども、経釈のゆくじもしらず、法文の浅深をこころえわけたることもそうらわねば、さだめておかしきことにてこそそうらわめども、古親鸞のおおせごとそうらいしおもむき、百分が一、かたはしばかりをも、おもいいでまいらせて、かきつけそうろうなり。かなしきかなや、さいわいに念仏しながら、直に報土にうまれずして、辺地^{へんじ}にやどをとらんこと。一室の行者のなかに、信心ことなることなからんために、なくなくふでをそめてこれをしるす。なづけて『歎異抄』というべし。外見あるべからず。

(歎異抄後序より)

現代語訳

(これらは決してわたし一人の勝手な言葉ではありませんが、経典や祖師方の書かれたものに説かれた道理も知らず、仏の教えの深い意味を十分に心得ているわけでもありませんから、きつとおかしなものになっていくことでしょう。けれども、今は亡き親鸞聖人が仰せになっておられたことの百分の一ほど、ほんのわずかばかりを思い出して、ここに書き記したのです。幸いにも念仏する身となりながら、ただちに真実の浄土へ往生しないで、方便の浄土にとどまるのは、何と悲しいことでしょうか。同じ念仏の行者の中で、信心の異なることがないように、涙にくれながら筆をとり、これを書いたのです。「歎異抄」と名付けておきます。お念仏の同朋以外には見せないで下さい)

*

歎異抄後序の終わりの文となり、歎異

抄全体の結びの言葉となりました。唯円房様はこの書を自ら、異なるを嘆く『歎異抄』と名付けています。この書は、親鸞聖人の仰せくださる真実信心に異なる説を嘆き、それを正すために書きつづられたものであることを示されています。しかもここで唯円様が、ここに述べてきた言葉は「わたしの勝手な言葉ではなく、」釈尊から七高僧・親鸞聖人へと伝承されてきた「仏語」ないしは「仏意」にかなった仰せ」であり、その「仏意」を先師親鸞聖人からお聞かせいただいた、それをまだ自分(唯円)が生きている間に後世に残し、それによって、親鸞聖人がお亡くなりになって後に、聖人の仰せでない諸説が起る中で、それを正したいと願って書きとめられた言葉であると、唯円様は申されるのであります。

それは唯円様の時代のみならず、遙かなる未来に残された「まことの言葉」でした。ここで唯円様が「経釈のゆくじもしらず、法文の浅深をこころえわけたること、そうらわねば、さだめておかしきことにてこそそうらわめ云々」と申されているのは、自分の書いたことはあやふやなことだというような自信のないことをおっしゃるのではなく、自分は経釈を深く学んだ者ではない愚かな者であるが、その愚かな自分に仰せくださった聖人様のお言葉をその通りに有難く聞いていたでいて、それを人々にお伝えし、また聖人様の思し召しに従って見た今日の異義への嘆きを述べられたのであります。

聖人の仰せでない説がどこから現れてくるかと言え、浄土の経典や七高僧の著作、とりわけ親鸞聖人の仰せに対して、(わたしのことば)すなわち自見の覚悟

(自分流の勝つてな考え)でもって本願念仏の教えを理解してしまう。そしてそれが正確な真宗理解であると本人が思いこんで、人にも語っていくからでしょう。そういうことがしばしばあったのであります。

だいたい自見の覚悟をする人たちはその当時の知識人だと思えます。その時代その時代に知識人がいて、自分の考えやその時代の人たちの考えに合うように、仏の言葉を自己流に読み込み、まげて解釈していく。そうすると、一般の人はその時代の風潮にマッチしたような説明を聞くため、それが正当な浄土真宗であるかのように受け取っていくのです。そういうことはいつの時代にもあったのであります。

どうしてそういうことがたえないのかというと、『歎異抄』全体の要といふべき第十章に

「念仏には無義をもつて義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」とおせそうらいき

とあるように、本願念仏の救済(念仏往生の願)が不可思議な救済であることを無視して自分なりに思議し解釈して、不思議な浄土の教えを自分の思議に合うように変形し、自分に納得でき他にも分かるようにと計らうのです。こうして変形された教義が、あたかも正当のような顔をして、「これこそ聖人の浄土真宗だ」と語られていること、それを座して忍ぶことができなかつたのが唯円様でした。

*

しかもそうした異義をふせぐためばかりではありません。「さいわいに念仏しながら、直に報土にうまれずして、辺地にやどをと」ってしまう、いわゆる不定

聚の人たち(浄土への往生が定まらない人たち)を悲しみ、真実信心に帰入することを願って『歎異抄』が書かれたのでした。

お念仏にであい、お念仏申す身になりながら、なおも自力疑心に封じられて、「往生はまるまる本願他力にてたすけたもうこと」がいただけないのを悲しまれるのであります。お念仏に親しむ身になるということはすでに如来様のお力に促され、如来様のご念力を深くこうむっている姿であります。自分ではそうとは思えなくても如来様の手厚いご養育が実を結ぼうとしているのであり、如来様の慈悲にいつもこそすれあつていられる人です。

にもかかわらず、「辺地にやどをと」ってしまうことを唯円様は「かなしきかな」と嘆いておられます。異義の人たちにたいしては「仏の怨敵なり」(第十二章)とまで厳しく言われる唯円様はここでは「かなしいかな」と自力の念仏者を悲しみ痛んでおられます。

なぜ念仏申しながら、自力疑心の称名念仏になるのでしょうか。これも同様に「念仏は義なきを義とする」にも、かわらず「我が名を称えよ」という不思議なお助けを(そのまま不思議と信じる)ことができなからずです。いわば「義なき」という理屈なきお助けに「義(理屈)をさしはさんでいるからです。

そして最後にこの『歎異抄』は「お念仏の同朋以外には見せないでください」と締めくくられています。それはこの書を「自らの救いを問題として」読まず、第三者的な立場で読むと、誤解するだけでなく、真宗を誹謗することになりかねないからではないでしょうか。(一)

【初めてのインド9】

プリンダーバンから首都デリーに入る。デリーではレッドフォードというムガル朝時代の城や大きなイスラム寺院などを見、マハトマ・ガンジーが火葬に付せられた場所を訪れた。途中、「バードホスピタル」と看板のある大きな小鳥の病院があった。ジャイナ教の施設だという。ジャイナ教は生き物の生命を害することを厳しく制するので有名な宗教であるが、こういう病院を建てるのはいかにもジャイナ教ならではの思った。

さて、この頃になると旅の行程は四十日近くなり、疲れもたまり、その頃の記憶も薄れてくる。デリーから汽車でボンベイに戻り、またラマクリシュナミツションにお世話になる。ボンベイではジャイナ教の寺院にお参りした。教祖のマハービラの像はブツダによく似ている。寺院の中の僧侶は手に虫除けのほうきのようなものをもって歩いていた。虫を殺さぬように歩くためである。いよいよ日本に帰る日になった。日本に帰るのがいやでいやで、ずっとインドに留まりたかった。かといって予約している飛行機をキャンセルしてこのままインドに留まることもできず、残念至極でインドを発つことになった。「必ずもう一度インドに帰ってくる」と心の中で誓って一行の皆さんと大阪行き飛行機に乗り込んだ。昭和四十五年十一月、インドの興奮が身心に満ちたまま帰国した。

この旅行でことに感じたことは、インドは非常に貧しい人たちが多く、さまざまな悲惨さを目の当たりにしたが、国そのものは豊かな国であると思っただけ。ただ貧富の格差がひどすぎる。そして非常に宗教的な国であることに圧倒された。とくにアシュラムという精神修行の道場が諸処にあつて、これが日本にないすばらしいものと感じた。またこの町や村にいつでもインド歌謡の音楽があちこちから聞こえてくる。それがかもしだす雰囲気は幻想的でこの世から抜け出ていくような感

情にひたつた。これも日本にはない。総じて日本の現代文化はいい意味でも悪しき意味でも世俗主義でまったく覆われている国であることを身にしみて感じた。もちろんこの時代の私は若かったから、若気の至りで、インドに惚れて「あばたもえくぼ」に見えていたことはいなめない。しかし、インドからは聖者は出ても、近代日本からは聖者は出ないのは当然で、二十世紀最高の人物マハトマ・ガンジーがインドに出たのもうなずけた。最後に、このようなすばらしい旅行計画を立ててくださり、一緒に案内してくださった内垣日親師に今も感謝している。(完了)

一蓮院師が

「どうなるでもこうなるでもなかった。如来様が助けてくださるのであった」
といわれるような丸々のお助けがいただけなくて、